

平岡いきものはっけん隊からお届けする地域の自然情報誌

# 季刊 湘南自然誌 Vol.7

2017

秋  
の  
記録号

〈巻頭特集〉

## 「自然と童話は子どもの ワンダーランド！」

やまだ よしろう

山田吉郎先生 × 堀田佳之介 副園長

鶴見大学短期大学部保育科教授  
文学博士



ヨモギハムシ  
10月茅ヶ崎市行谷にて

〈特集2〉「越冬する昆虫～虫は冬にどこに行っちゃうの?～」

P1 四季のたより  
はっけん隊について

巻頭特集  
P2-7 「自然と童話は子どもの  
ワンダーランド！」

P8-P12 2017.9月-11月  
生き物はっけん記録

P13-14 はっけん隊活動報告

P15-16 特集2 越冬する昆虫  
～虫は冬にどこに行っちゃうの?～

P17 第6回『あいだ先生のチョウ教室』  
～チョウが好む花と樹液のはなし～

とっておきの一枚  
P18 写真投稿コーナー  
はっけん隊のからのお知らせ

絵画投稿コーナー  
P19 おえかきひろば



「にんじゃばった」 画：みなき あやめ (5 さい)

※にんじゃばッター=ヒメクダマキモドキ  
木の葉っぱの上でじっと動かない、かくれんぼ名人  
(詳細はP1を見てね!)

自然はみんなのワンダーランド!

# 平岡四季のたより

2017年秋の平岡っ子たち



園舎外装工事の影響で止まってしまった井戸水が元に戻り、園庭池と原っぱ池共に水が入りました。池には早くもシオカラトンボ属の若齢幼虫が見られ、ミズカマキリ、コガムシ、マツモムシなどの飛来も確認できました。ようやく元の姿に戻りつつあります。

さて、今号の表紙絵にもなりました子どもたちの人気者“忍者バッタ”。この忍者バッタとは、南方系のキリギリス“ヒメクダマキモドキ”のことで、かくれんぼの名人です。葉っぱの中にいると見つけるのが非常に難しく、大人でも中々見つけられないのです。ぜひ右の写真で見つけてみて下さい。

一部のクラスでやった色水あそびも人気でした。木の実、葉っぱ、花などを水に入れるのですが、そのままだと色は変わらず、「かき混ぜてみよう」(変わらない)、「割ってみよう」(あ、少し色が出た!)「潰してみよう」(すごい色が出てきた!)と試行錯誤しながら、色が出た時のうれしそうな笑顔が印象的でした。また、色が出るものと出ないものがあること、入れる素材によって違う色の出方、他のものと混ぜた時の色の変化、などその後も色々な方向にあそびが発展していく様子を見ていて、水と容器と植物だけでこれだけ楽しめるものかと新たな発見になりました。

また、夏号の特集で紹介した“動物のお面づくり”も人気でした。花を使ったり、木の実を使ったり、自由な発想でアレンジされていくお面に、とっても面白さを感じました。(堀田)



## 「平岡いきものはっけん隊」と「湘南自然誌」について

### 「平岡いきものはっけん隊」って?

「平岡いきものはっけん隊」(略称:はっけん隊)は、平岡幼稚園の在園児と卒園児及びその家族と、教職員、有識者による顧問等で構成されています。平成28年3月に佳之介副園長の呼びかけで発足しました。あつまりやイベントへの参加義務はなく、隊員それぞれができる範囲で自然と関わる機会を作っています。

### 「季刊 湘南自然誌」はどんな本?

本誌は、子どもから大人まで生き物の不思議・面白さをより深く楽しみながら学ぶための教育誌です。また、隊の活動報告を行う隊報、地域の自然情報を広く発信する情報誌でもあります。

※ みんなで集めた生物記録を、研究目的でも利用可能な形式で編集した記録集「別冊 湘南自然誌」も発行予定。

#### 【はっけん隊の先生紹介】

名誉顧問 : 岸一弘 (日本生態学会会員)  
世話人 : 會田重道 (日本鱗翅学会会員)  
呼び掛け人: 堀田佳之介 (平岡幼稚園副園長・日本セミの会会員)

① 安全第一!

#### はっけん隊のお約束

② 持って帰るなら最後まで飼う、逃がすなら元の場所に!

巻頭特集

自然と童話は子どもの  
ワンダーランド！

鶴見大学短期大学部保育科教授・文学博士

やまだ よしろう

山田吉郎先生

平岡幼稚園

堀田佳之介 副園長

## 〈山田吉郎先生 Profile〉

昭和29年、神奈川県秦野市生まれ。東北大学文学部国文学科卒業、同大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。日本ペンクラブ・現代歌人協会会員。歌誌「ぶりずむ」選者。丹沢文学研究家。著書に、『前田夕暮の文学』（平成4年、夢工房）、『前田夕暮研究—受容と創造—』（平成13年、風間書房）、歌集『蝶の記憶』（平成10年、短歌研究社）、歌集『実朝塚の秋』（平成15年、短歌研究社）、歌集『猫坂物語』（平成16年、短歌研究社）、丹沢山麓童話集『とどろく谷の怪獣』（平成19年、夢工房）、『丹沢の文学往還記』（平成21年、夢工房）、『明治短歌の河畔にて』（平成26年、短歌研究社）等がある。平成5年、前田夕暮の研究により第10回岡崎義恵学術研究奨励賞受賞。

## 自筆の童話「丹沢山麓童話集」のお話

堀田佳之介（以下 堀田）> 今日国文学の博士でいらっしゃる山田先生にお話を伺えるということで、文学や民話・昔ばなしを通して、今子育てをしているお母さんやお父さんに自然と触れ合うことの大切さを知ってもらえるような、そんな内容の特集にできればと思っています。今回の対談に備えて秦野に残されてきた民話なんかをいくつか読んできたんですけど、まずは先生が書かれた創作童話集『とどろく谷の怪獣』（夢工房）のお話をお伺いしたいと思います。この童話集は、先生の生まれ故郷であり今もお住いの丹沢を舞台に、少年少女が山河を探検して帰って来るお話が3篇収められています。どういったきっかけで出された本なんでしょうか？

山田吉郎（以下 山田）> 私は国文学の研究者として、自分が生まれ育った丹沢山麓の風土から生まれた文学の研究をしてきたんですけど、いつからか自ら「童話」という形でふるさとを描いてみたいなあと思い初めまして、折に触れて小さなお話を書いてきたんですよ。それが

ある程度溜まってきたので、童話集として10年くらい前にうちのすぐそばの夢工房という出版社から出したものなんです。実はこの前も2冊目の原稿を渡してきたんですよ。

堀田> 続編が出るんですか？

山田> そう、今度はカッパだとかガマガエル（アズマヒキガエル）だとか、あとキツネの祠みたいなとかね、そういうのが出てきます。昔近くにキツネの祠みたいなのがあってね、子ども心にちょっと怖かったりしたんだけど同時に興味もあるんです。学校の帰りにそこに寄って中覗いたりして。一応そんな体験を基に書いてるんですけどね。丹沢山麓童話集の第2弾ということになります。『なべわり山のふうたろう』というのが第一話なんですけど、それを本の表題にしました。鍋割山って山が丹沢にあるでしょ？

堀田> 三廻部の上の方？

山田> そうです。そこに天狗小学校があって…みたいなお話なんですけど、実際にはあそこに天狗の伝説があるかどうかは難しいところなんです。ただ大雄山とかあっちの方に行くと天狗の伝説がありますし、そういった伝説からも着想を得ていますね。

堀田> 『とどろく谷の怪獣』の舞台は先生のご自宅の近くなんでしょうか？

山田> ええ。くずは台病院がありますよね？あそこから北の方へ上がっていくバス道路があるんですけど、あそこの谷側が「とどろくの渓谷」。

堀田> あそこですか。あの渓谷は上と下とで風景が全く違うじゃないですか？上は住宅地ですけど下は別世界ですね。



平岡幼稚園屋上から望む丹沢山麓

山田 > 今も下の方は40年50年前と変わってないですね。流れている時間が違うとかそういう場所ですね。かなり深い溪谷(葛葉峡谷)ですけど、子どもの頃はよく下まで降りて魚釣りしてましたよ。ホントに暗あい迷路のようなどころに入って行ってね。話の中に釣りの場面がありますが、実際釣ったんですよ、変な魚を。何だろうこれは？って思ってたうちの池に入れておいたら結構長生きしましたね。友達感覚でしたよ。



童話「とどろく谷の怪獣」の舞台となった葛葉峡谷  
(高さ10mのつり橋より撮影)

堀田 > 何の魚だったんですか？

山田 > 何だったんだろう？ハゼみたいな魚だったなあ。足があるように見えて怪獣みたいだったんだよ。

堀田 > やはりそんな体験が基にあったんですか。昔

堀田 > 今は家にへびが出てきたら神さまとして見ることはなかなかできないですよ。昔の人とは感覚が全然違いますね。

山田 > そうですね。特に幼稚園教育の場ではへびは難しいでしょ？

堀田 > ヒバカリは幼稚園でもたまに見かけるので、園児達も触っていますよ。小さくてかわいくて毒もないへびですから。逆に危険なマムシは今は減っているの、自然豊かな湿地なんかに行かないと出会えないですね。

山田 > 秦野に住んでる私だってマムシは最近まったく見てないですよ。



ヒバカリと戯れる園児たち

### 童話・民話に多い「キツネ」

堀田 > 秦野の民話や童話を読んでみると、生き物とのやり取りのお話がとても多いですね。

は今より生き物たちが身近な存在だったんですね。

山田 > へびなんかでも怖いイメージがありますが、昔は学校の池にへびが泳いでたりね、家の中でも土間の中を歩いていたり、得体のしれないものと同居している感じがありましたね。へびの話は丹沢山麓の昔ばなしにも結構ありますよ。



山田吉郎先生の著作『丹沢の文学往還記』と『丹沢山麓童話集 とどろく谷の怪獣』(夢工房)

堀田 > そうですね。お嫁さんがへびに食べられてしまった、っていうような怖い話もありましたけど、どっちかっていうと神聖化されてるといふか守り神扱いされてることが多い気がします。

山田 > 信州の方の昔ばなしを童話作家の松谷みよ子さんが童話化した『龍の子太郎』という本があるんですけど、それなんかも近いかもかもしれないね。

山田 > そうですね。中でもよく出てくるのはキツネなんですよ。

堀田 > それは私も思いました。たしかにキツネがよく出てきますね。なんでなんですかねえ？

山田 > 昔は「キツネが化かした」って言い方があったけど、人間にとってキツネというのは、知恵比べの相手とかね、動物なんだけど人間を超えるようなところがあつたりして、そんなキツネとの関係からいろんな物語が生まれるんですよ。有名などころでは、愛知県の方ですけど新美南吉の『ごんぎつね』というのがあるでしょ。向こうの伝説を新美南吉が童話化してね。それが今では絵本化されたり小学校の教科書にも載ってますね。『ごんぎつね』は私も大学の授業で取り



平岡幼稚園にも教え子の教諭がいる山田教授です。

上げたりするんですよ。キツネが人間にいたずらをして、それでちょっとキツネが反省して村人に贈り物を届けるんだけど、逆に最後鉄砲で撃たれちゃうっていう悲しいお話なんだけどね。これは名作です。

堀田 > 秦野に特にキツネが多かったというわけではないんですね。

山田 > そうですね。キツネにまつわるお話は全国的なものですね。一般的にどこにでもいたんでしょうね、キツネは。



堀田 > 化けるのは一緒ですけど、秦野の民話を読んだ限りではタヌキの昔ばなしはあんまりないような気がするんですが。

山田 > タヌキはあんまり出てこないですよ。キツネ

堀田 > キツネはどことなく憎めない存在として描かれていることが多いように思いますね。村人が意地悪されちゃったりするんだけど、最終的にはほっこりするようなお話が多いですね。どこか親しみを持って接していた部分もあるのかなあと。

山田 > そうですね。キツネの本性が悪いというよりは、お互い化かし合うっていうかね、そういうやり取りが面白いんだろうと思うんですよ。私が子どもの頃の昭和30年代の前半くらいには、みんな秦野駅からうちまで歩いて帰るわけですよ、バスが通ってなかったんでね。それでまわりのおじいちゃんたちが話してるんですよ。「お酒飲んできて帰る途中でどこそこで寝ちゃったよ。キツネに化かされたね。」とかね。そうやってキツネのせいにするんですよ(笑)人間の自業自得なのにキツネのせいにする。そんな言い方をまわりのおじいちゃんたちはしてましたね。



11月22日、横浜市の鶴見大学に伺い対談してきました

のお話で有名なのもう一つあって、これですね、宮沢賢治の『雪わたり』。これは幼い男の子の兄妹がキツネの幻燈会に呼ばれて行くというお話なんだけど、これも名作です。この本と『ごんぎつね』は幼児教育でも5歳児くらいなら扱えるんじゃないかな。



キツネが登場する名作絵本  
『ごんぎつね』(新美南吉作・黒井健 絵・偕成社)  
『雪わたり』(宮沢賢治作・堀内誠一 絵・福音館書店)

堀田 > これは人間にいたずらをしたりっていうお話ではないんですね。

山田 > 大人は、キツネは人間を化かすっていう悪いイメージがあるんだけど、そうじゃないんだよって幼い子どもを招待して分かってもらおうとするようなね、そんな誤解を解こうとするお話なんですけどね。これも教科書に載ってますね。このお話は歌が多くてミュージカルの要素があるんですよ。歌う場面があると子どもは喜ぶでしょ?そんなこともあって、昔はよく学芸会とかで演じられたみたいですね。



堀田 > ああ、そんな感じのお話はこの本(『秦野の民話』『秦野のむかし話 伝統をたずねて』岩田達治著)の中にもありましたね。

山田 > キツネと人間は、大きなケンカになるような関係じゃなくて、かと言って和気あいあいと仲がいいわけでもないんだけど、悪口を叩き合いながらお互い分かり合ってるというか、そんな風な間柄なんじゃないかな。

堀田 > 人間に近い存在だったんですね。

山田 > そうですね。近いし対等っていうかね。『くまの子ウーフ』みたいな新しい童話でも、キツネはちょっと意地悪なキャラクターとして登場しますね。もう一つ有名なところで、これは海外のお話になっちゃうんだけど、ウクライナ民話に『てぶくろ』というのがあるんです。これですね。

堀田 > これは読んだことありますね。

山田 > その中にもキツネが出てくるんですね。いろんな動物たちが服を着て登場して、おじいさんが落とした手袋の中に入っていくお話なんですけど、その中でキツネは「おしゃれギツネ」って言われてるんだよね。キツネっていうのはある種の色気みたいなものがあった、こうやって女性の服装をさせてもつんと澄ましたようなね、そんな女性像とマッチするんですね。

堀田 > 海外でもキツネは愛嬌のある存在として描かれることがあるんですね。ただキツネに化かされるとかは日本だけなんですかね？

山田 > うーん、どうですかね。海外の作品だと…パツとは思い浮かばないね。イソップ童話にはあったでしょうか。海外だとキツネというより、オオカミが出てくるんですよ。



キツネが登場するウクライナの名作絵本『てぶくろ』  
(エフゲーニー・M・ラチョフ著・うちだりさこ訳・福音館書店)

堀田 > ああ、オオカミですか。『赤ずきんちゃん』とか『三匹の子豚』とか。たしかに多そうですね。逆に日本では少ないのかなあ？

山田 > 日本ではキツネよりは少ないですね。秦野にもあるんですよ、オオカミの話は。秦野の民話を研究し

そんな自然との付き合い方を私たちに教えてくれるのかなあと思うんですが。

山田 > そうですね。今はキツネもオオカミも見ないんだけど、それらが象徴するものはあるんですね。それから、昔があって今があるんだっていうことを理解するためにはやっぱり民話や昔ばなしを読むのがいいんです。幼稚園では七夕とか節分だとか年中行事をととても大事にしますが、そういう行事の意味を実感を込めて理解するためには、昔ばなしや民話が重要になってくるんですね。節分にしてもじゃあ鬼って何なの？って思ったら一寸法師とか桃太郎とかを読むと。いろんな古代からの地層があって今があると。それから、最初にちょっとお話しした『龍の子太郎』を書かれた松谷みよ子さんが、民話・昔ばなしが自分の童話の基になってると言ってるんですね。民話というのはそこに流れてる時間の厚み・量が違うわけですよ。新しい創作童話もそういう民話の厚みを背後に持って生まれてくるんですね。

堀田 > なるほど。民話の持つ厚みを失ってしまったら、新しいお話も薄っぺらいものになってしまうというこ

ている岩田達治さんが集められた民話集に『古家のムル』っていうのがあるでしょ？

堀田 > ああ、ありましたね。

山田 > キツネと違ってオオカミはとても怖い存在、襲ってくる存在として描かれていることが多いですね。



## 自然との付き合い方を教えてくれる民話

堀田 > 民話の中で繰り返し上げられるキツネやオオカミと村人との関係というのは、自然と私たち人間との関係を象徴してるような気がするんですよ。雨が降ったり日照りが起きたり、キツネに化かされるように翻弄され、時にはオオカミのように台風や地震で襲い掛かってくる。でもそんな自然とうまく付き合っていかなければ自然の恵みはもたらされないわけです。民話は

とですね。私自身秦野の民話を読んでいて今一よくイメージできない部分があったりして、すらすらとは読めなかったんですね。昔の人は生活そのものが自然に囲まれていて、その中からお話が生まれてきているわけですけど、今の私たちはそんな環境で生きていないので、民話の内容がうまく理解できない場合が出てくる。そう考えると新たな創作童話も重要ですね。新作童話が今の私たちと昔の民話の世界を繋いでくれるのかもしれない。

## 何かが一緒に暮らしている という感覚が大事



山田 > それとね、さっきあなたが「民話や童話には生き物とのやり取りのお話がとても多い」っておっしゃってたけど、「何かが一緒に暮らしてる」って感覚が大事

なんじゃないかなあと思うんですよ。うちでは今でも池でガマガエルが産卵してたりして、どうも代々棲み付いてるみたいなんですけど、たまに踏んじゃったりするんだけどね(笑)、今マンションなんかに住んでたらそういうものはいないじゃないですか？すべて整理されて分かっているものしかない。昔大掃除なんかするとね、タンスの引き出しの中にネズミの赤ちゃんがいっぱいいたりしてね。「ああ、こんなところにネズミの世界があったんだ」って目にきてる。人間だけがそこにいるんじゃないんだっていう感覚があった。幼稚園でも保育室には人間しかいないし、園庭には遊具しかなくて、あるものが全部見えてるわけです。平岡さんの園庭だと何がいるか分かんないけどね(笑) 幼児教育の場でもそういう何か見えないものがあるという感覚が大事なのかなあと思うんですよ。

堀田 > ちょっとイレギュラーなことがあるくらいの方が、子どもを育てる環境としてはいいんですかね？



「見えないもの」があるからこそ踊る子どもの心

いう時代になって来ちゃってるね。

堀田 > 確かにそれだと、想定内のことしか出来ませんね。

山田 > 子どもにはワンダーランドがないとダメなんです。葉っぱ一枚から遊びを生み出したり、トンボを追いかけたり、秘密基地を作ったり、そういう場所が必要なんです。横浜みたいな都会だと難しいかもしれないけど、それでもここ鶴見大学には總持寺の広大な敷地があって、割と自然が残ってるんですよ。まわりの保育園や幼稚園の先生が子どもを遊ばせていて、見ると子どもたちは生き生きとしますよ。ただ小学生なんかだと、先日も鐘付き堂に集まってるんで何してるんだろう？って見てみるとゲームしてるんだ(笑)

堀田 > ここでしかできないことをするんじゃないなくて、どこでもできるゲームしてるってもったいないですよ。



總持寺鐘付き堂付近

## 豊かな感性を育む、五感を使った体験

山田 > そう、もったいないね。見る・触る・匂いを嗅ぐ、そして食べてみる。そうやって感覚を磨いて行って欲しいんですけどね。私なんかは昔スカンポ(スイバ)とか食べたり、花の蜜吸ったり、あとアケビを採って食べたりしてましたけど、今の子どもだってやってみれば面白がると思いますよ。

五感で体験してみないと分からない…だから自然は楽しい！



ふとクスノキの実の匂いをかいだら…

## 子どもにはワンダーランドがないと

山田 > そうですね。子どもは新しい発見をして面白がらないとダメですよ。動物園に行ってゾウを見ましようって言ったって、それはそれで楽しいかもしれないけど、予定通りの存在がそこにあるだけなわけです。平岡さんの園庭だと思いがけないものを発見してハッとすると、そういう喜びがある。それが生き生きとした好奇心や感覚を育てるんじゃないかなあ。

堀田 > なるほど。大人がこういう風楽しむんだよって作ったものには新たな発見が少ない。限られた体験しかできないってことですね。

山田 > 五感が生き生きと働きだすのは、得体のしれないものがあるかもしれないという空間だと思うんです。そんな環境に至る所にあったのが昔ばなしの時代なわけですけど、今は釣り堀りに行って、ここではニジマスが釣れますよっていう場所でニジマス釣ってと

堀田 > 幼稚園でもアケビが採れるんで、園児と先生とで食べてみたことがあるんですけど、子どもも先生も「美味しくない！」って言うんですよ(笑) 私なんかは子どもの頃美味しい美味しいって喜んで食べてたんですけどね…ごちそうって感じで夢中になって木登りして採ってました。



『ぐりとぐら』(中川李枝子文・大村百合子絵・福音館書店)を読み解く山田先生

山田 > 子どもにとって食・味覚っていうのはとても重要な要素ですから、童話でも食べ物を扱ったものは人気があるんですよ。『ぐりとぐら』とかね。森に行っても思いがけず大きな卵を見つける。とても持って帰れないということで、森に調理道具を持ってきてカステラを作るわけです。そうすると森の動物たちがちょこちょこ集まってくる。ここで「ああ美味しそう！」と子どもたちは喜ぶわけですよ。それでみんなで分かち合っで食べる。これが幸せの絶頂ですね。



堀田 > 先日、親子で幼稚園に生えてるイチョウの銀杏を拾って、実を洗って電子レンジでチンして食べてみるまで行うイベントをやってみたんですけど、みんな大はしゃぎでしたね。ムクノキの実なんかだと園児たちは美味しくないって言うんですけど、でもなんか口にただけで楽しそうな感じなんですよ。

山田 > それはね、一生憶えてる味ですよ（笑）

堀田 > そんな経験になってくれたらいいですね。その辺の野原にあるものでも「これ食べれるんだ」って知るとそれだけで愛着が湧いてきたり、じゃあもっと探してみようって好奇心が湧いてきたり、食は自然体験のいい入り口になりますね。

山田 > そうそう、それは意識して作ってるんですよ。そしてね、これは別に子どもに限った話じゃないんですね。大人にとっても「行って帰る」ことは重要で、この前授業で触れたんですけど、9月30日の読売新聞夕刊に養老孟司さんの記事“自然にまかせ 意味を求めない”というのがあって、そこで「自然と自宅との参勤交代が大事なんだ」とおっしゃってるんですね。意味がない自然と意味だらけの都市を行ったり来たりしよう、と。



堀田 > 「意味がない」って、解釈が難しいですね？

山田 > たしかに難しいですね。保護者に言うにしても難しいですね。「意味がないじゃ意味がない！」とか言われてしまいそうですけど…つまり、私が思うに、意味を持たないということは、逆に言うと、あらゆる意味があるということでしょうか。あらゆる意味が詰まっているところが自然なんですよ。

堀田 > あ～、その方がわかりやすいですね。

## 野山と街を行き来しよう

山田 > そうですね。さらに食から話を進めると、『ぐりとぐら』で、森の生き物たちとみんなで分かち合って食べる場面があるでしょ？私はそこで終わってもいいんじゃないかと思ったんですけど、作者の中川李枝子さんはそこで終わらせないんですよ。ちゃんと帰るところまで描くんですね。瀬田貞二という児童文学者が、『幼い子の文学』（中公新書）という本の中で「行って帰るのが子どもは大好きだ」って言うてるんですね。たとえば「はないちもんめ」のような遊びにも行って帰ってくる運動が組み込まれているし、物語でもそういう仕組みのものを好むって言うんですね。そのことの意味を考えると、行って帰ってくる運動を繰り返すことで子どもは成長していくんだらうなど。行く前の自分と帰ってきた後の自分は同じではないわけです。遠足に行って帰る、運動会に行って帰る、芋ほりに行って帰る、そういう繰り返しの中で新たな発見を重ね、やがて小学生になっていく。

堀田 > 先生の童話も行って帰ってくる形になってますね。



山田 > 都会というのは、全部意味で分けられている訳です。歩道はこういうところですよ、駅はこういうところですよ、というようにね。ところが自然はそういう区別がない場所なんです。

堀田 > 自然はその人の見方、感じ方によって、様々な意味が見いだせるということでしょうか？

山田 > いろんな見え方がある、見え方に無限の可能性を与えてくれる、ということでしょうね。特定の意味がないというと、意味がない所へ行ってどうするんだ、ということになってしまうのですが、そんな風に感じることで自分が精神の貧しさになってしまっていると思うんですよ。

堀田 > 子どもも大人も「自然に行って帰って来る」ことで心が豊かになっていくということなんですね。すっかり暗くなってきてしまいました。今日は長い時間ありがとうございました。

山田 > ありがとうございました。





# 速報 みんなが集めた 生き物はっけん記録



## 生き物の写真募集!

昆虫・カエル・鳥・野の花など何でもOK!  
写真データと「いつ」「どこで」「だれが」  
を添えて下記アドレスまで。  
(隊員以外の方の投稿も大歓迎)  
[ikimono@hiraoka-kg.com](mailto:ikimono@hiraoka-kg.com)

## 2017年 9月~11月

註1) 本欄の記録は正式な発表ではありません。後日発行予定の『別冊・湘南自然誌』に本年度の記録をまとめて掲載し、そちらを正式な発表とします。なお、重要性の高い記録は各専門誌に投稿します。  
註2) ここに掲載されている記録は、難しいものはっけん隊名誉顧問の岸一弘先生に同定して頂いております。

### 【昆虫類】

危険な生き物

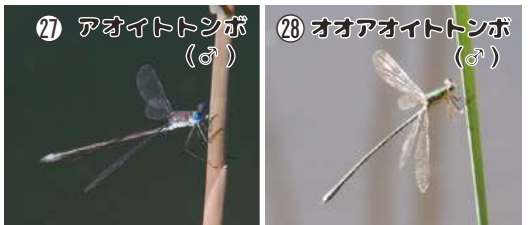
#### ◇チョウ目

- ナミアゲハ**：(終齢幼虫) 平塚市めぐみが丘 9月 市川寛人 (写①)  
：(夏型) 平塚市土屋 9月 堀田來佳 (写②)
- キアゲハ**：平塚市山下 9月 吉田ゆかり・夕夏 (写③)  
：(終齢幼虫) 平岡幼稚園 9月 富岡誠一 (写④)
- クロアゲハ**：平岡幼稚園 9月 堀田佳之介 (写⑤)
- モンキアゲハ**：平塚市万田 9月 堀田來佳 (写⑥)
- アオスジアゲハ**：平岡幼稚園 9月 富岡誠一 (写⑦)
- ジャコウアゲハ**：(終齢幼虫) 平岡幼稚園 10月 ゆり組 (写⑧)  
：(蛹) 平岡幼稚園 10月 ばら組 (写⑨)
- ヤマトシジミ**：平岡幼稚園 11月 ちゅうりっぷ組 (写⑩)
- モンキチョウ**：平塚市岡崎 11月 鈴川散策 (年少) (写⑪)
- ヒメアカタテハ**：平塚市岡崎 10月 秋の遠足 (写⑫)
- アカボシゴマダラ**：(蛹) 平塚市日向岡 9月 山本智美 (写⑬)  
：平塚市徳延 9月 吉田ゆかり・夕夏 (写⑭)
- ツマクロヒョウモン**：平塚市山下 9月 吉田ゆかり・夕夏 (写⑮)  
：(♀) 平岡幼稚園 11月 佐々木水香 (写⑯)
- ヒメエグリバ**：(幼虫) 平岡幼稚園 11月 ちゅうりっぷ組 (写⑰)
- フクラスズメ**：(幼虫) 平塚市岡崎 10月 秋の遠足 (写⑱)
- エビガラスズメ**：(幼虫) 平塚市めぐみが丘 9月 平川圭 (写⑲)
- セスジスズメ**：(幼虫) 平塚市日向岡 9月 山本陽向・智美・武翔 (写⑳)
- ：(幼虫) 平塚市唐ヶ原 11月 吉田結陽・ゆかり・夕夏 (写㉑)
- アケビコノハ**：(幼虫) 平岡幼稚園 9月 富岡誠一 (写㉒)
- ウスキツバメエダシヤク?**：平岡幼稚園 10月 富岡誠一 (写㉓)
- アカエグリバ**：平岡幼稚園 9月 いちご組 (写㉔)
- ブドウトリバ**：平岡幼稚園 9月 堀田佳之介 (写㉕)
- ミノガの一種**：平塚市土屋 10月 大野遥 (写㉖)



◇ トンボ目

- アオイトトンボ**：(♂) 平塚市寺田縄 10月秋の遠足 (写27)
- オオアオイトトンボ**：(♂) 平塚市寺田縄 10月秋の遠足 (写28)  
：(♂) 平岡幼稚園 10月もも・ちゅうりっぷ組 (写29)
- オツネントンボ**：(♂) 山梨県長坂町 10月 堀田ゆら (写30)
- オオルリボシヤンマ**：(♀) 箱根町元箱根 9月 堀田来佳 (写31)
- マダラヤンマ**：(♂) 山梨県 10月 大津誠 (写32)
- オニヤンマ**：(幼虫) 平岡幼稚園 10月 スミス健太郎・原田来楽 (写33)
- オオシオカラトンボ**：(♂) 平岡幼稚園 9月 たんぼぼ・ちゅうりっぷ組 (写34)
- アキアカネ**：平塚市寺田縄 10月秋の遠足 (写35)  
：(♀) 平塚市めぐみが丘 11月 平川圭 (写36)  
：(♀) 茅ヶ崎市芹沢 11月 尾上綾芽 (写37)
- ナツアカネ**：(♂) 平岡幼稚園 9月 原田来楽 (写38)
- ネキトンボ**：(♂・♀) 茅ヶ崎市茅ヶ崎 9月 堀田来佳 (写39)



◇ コウチュウ目

- マルガムシ**：平塚市上吉沢 11月 堀田来佳 (写40)
- コガムシ**：平岡幼稚園 9月 山本陽向 (写41)  
：平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写42)
- ガムシの一種**：(幼虫) 平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写43)
- モンキマメゲンゴロウ**：平塚市上吉沢 11月 堀田来佳 (写44)
- アオドウガネ**：(死体) 大磯町照ヶ崎海岸 9月 アオバト観察会 (写45)  
：平岡幼稚園 9月 堀田来佳 (写46)
- ヒメカシショコガネ**：平岡幼稚園 9月 堀田佳之介 (写47)
- ヨモギハムシ**：茅ヶ崎市行谷 10月 富岡誠一 (写→表紙)
- ヤノナミガタチビタムシ**：平岡幼稚園 11月 いちご組 (写48)



◇ カメムシ目

- アブラゼミ**：(ぬけがら) 平岡幼稚園 9月 ゆり組 (写49)
- ミンミンゼミ**：(死体) 平岡幼稚園 9月 ゆり組 (写50)  
：(死体) 平塚市岡崎 9月 小泉海太 (写51)
- クヌギカメムシ**：(♀) 茅ヶ崎市芹沢 11月 柳谷観察会 (写52)(写53)
- キバラヘリカメムシ**：平岡幼稚園 11月 ちゅうりっぷ組 (写54)
- コマツモムシ**：平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写55)
- マツモムシ**：平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写56)
- ヒメイトアメンボ**：平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写57)
- ミズカマキリ**：平岡幼稚園 11月 親子ビオトープ観察会 (写58)



⚠ さわらない!